

三

相

仏説無量壽經

爾時世尊。諸根悦予。姿色清淨。光顏巍巍。尊者
阿難。承_二仏聖旨_一。即從座起。偏袒右肩。長跪合掌。而
白_レ仏言。今日世尊。諸根悦予。姿色清淨。光顏巍巍。
如_二明淨鏡影暢_一表裏。威容顯曜。超絶無量。朱_三曾瞻_二
觀殊妙如_レ今_一。唯然大聖。我心念言。今日世尊住_二奇
特法_一。今日世雄住_二諸仏所住_一。今日世眼住_二導師行_一。
今日世英住_二最勝道_一。今日天尊行_二如來德_一。去來現
仏。仏々相念。得_レ無_三今仏念_二諸仏耶_一。何故威神光々
乃爾

聖者の表情

無量寿經序分の意。是浄土教の秘鑰

清淨法界常住の
威神の光明永しえに
無明に迷う子等が為
釈迦牟尼仏と世に出て
譬ば西に日は入るも
弥陀常住の日光は
仏陀出世の本懷を
即ち世尊寂靜に

阿弥陀如来の日輪の
十方法界照しては
方便不思議の力より
慈悲の聖旨を示します
光は月に映ず如と
牟尼満月に照すなり
靈鷲の嘉会に現しぬ
弥陀三昧に入ぬれば

浄界弥陀の靈光は

爾時諸根悦予して

光顔いよよ巍々として

恰も明浄なる鏡

如来清浄光明は

諸根はいとも清らけく

如来歡喜の光明は

一切諸仏の所住なる

如来智慧の光明は

衆生の無明を照しては

如来不断の光明は

最高徳の範として

人仏牟尼の身に現じ

姿色も殊に清らけく

威容の光顯なり

影が表裏に暢る如と

世尊の感覚に映現し

微妙奇特にいましける

世雄の聖情に融合し

大我の中に安住す

世眼の智慧と現われて

如実の知見を示しぬる

世英の聖意に動きては

最勝道に導きぬ

如來萬德円にょらいまんとくまんとかにて

三輪完全さんりんかんぜんの鑑かがみもて

人仏牟尼にんぶつむには一心いつしんに

本仏弥陀ほんぶつみだの靈德れいとくは

入我々入にゅうががにゅうの神秘しんぴには

甚深不思議じんじんふしぎの感応かんのうは

教主出世の本懷

如來無尽にょらいむじんの大悲だいひより

釈迦牟尼しやかむにと世よに出て

世よの群萌ぐんもうを拯すくわんと

天尊てんそんの身みに現あらわして

衆生しゆじやうに軌のりを垂たれたま玉う

本仏弥陀ほんぶつみだを憶念おくねんし

牟尼むにの聖意せいいに映現ようげんす

彼此ひしの三業冥合さんごうめいごうし

即すなわち斯教しきやうの奥旨おくしなり

三界さんがいの子こを矜あわれみて

光ひろく道教どうきやうを闡ひらきては

余よの方便ほうべんを措さしおきて

真理しんりの光ひかりにまします

即ち出世しゅつせの本懐ほんかいは

受けし本具ほんぐの仏性ぶつしょうを

また形氣けいきの煩惱ぼんのうを

智徳ちとく併ならべて備そなえては

衆生しゅじやう本有ほんぬの無明むみやうは

弥陀みだ常照じやうしやうの日光にっこうに

即ち菩薩ぼさつの階位かいゐにて

淨満月じやうまんがつは正覺しやうがくの

闇やみに迷まようは凡夫ぼんぷにて

円まじかに照てらして欠かけなきは

弥陀みだの靈徳れいとくをのべたまう

衆生しゅじやう本有ほんぬの仏ほとけより

開ひらきて真しんに悟ご入にゆうし

靈化れいかし菩提ぼだいの徳とくとなし

真しんの仏子ぶつしとせんがため

喻たとえば闇くらき月つきなれど

映えいずる影かげの盈欠みちかげは

新月しんげつすすみて十五じゆうごなる

仏位ぶつゐに成なりしすがたなり

菩薩ぼさつは分ぶんに光ひかりを得え

即ち妙覺果満みやうかくかまんなり

吾等はみおやの容器

我等が師なる教のみおや

人間は宗教的の働きを為す器である。工業場にて電気や蒸気にて運転する機関や機械のように我等は如来の不可思議なる靈力に依て動かさるる器械である。吾人が如来の靈力にて愉快の運転するように為らんには例えば工業場の器械が巧妙に出来て欠点故障なく又之を操縦する技師が能く業に精練したる靈腕を揮つて器械を操縦する時は毫も渋滞なく快転する。然る時は仕事の秩序も順調に技師も亦其業に興味を感じ身も心も其の仕事の中に没投して遂には時間の遷るも忘れ身体の疲労をも感ぜざるようになる。

宗教心も我等が此の身も心も凡ては実には弥陀の靈力に運転せらるる器具である。

故に全く此の身と心とはもと法身から受けたので有から身も心も実に巧妙に出来て居る。而して四肢五官及び総ての身体の器械も亦血氣循環や呼吸や発声機関などの生理的調節機関が能く順調にして宜しきを得れば自然に如來の靈的電氣に感じて快転す、此の身も心も弥陀如來の電氣に依て靈き働きを為すべき器械たると又機関とである。故に此の如來の器たる身心を精練し、機関の操縦法を能く練修する時は意の如くに快転し、聖旨に契う働きを為すに応分に自由となる。

教祖は自ら如來の器たる御身心を能く研きて我等のために好模範を御示しなされた。然れば我等の身体各部の五官より筋骨に至るまでいかなる処にても如來の光明に依りて清められ、又恩寵に充たされて自由に快転するようにすべきである。縱令精神と志氣とがいかに猛威なるも身体機関の調練宜しきを得ざれば意の如くに自己の身体を運転させることが出来ぬ。故に此の身器の精練を忽緒にしてはならぬ。

身心の靈化

若し人が信仰に入る時は此の心が如来の光明に靈化せられて麗しく生れ更るばかりでなく此の身体各部も同じく如来の光明に充さる時は玲瓏と輝き快く運轉するようになるべき器なれば必ず調練をしなくてはならぬ。人は宗教的に使用せらるる程高等なる靈妙なる身心なれば他の動物とは大に異つて居る。動物は馬は馬、牛は牛の本能のままで自分の性質のままに生きて居つて宜いので調練の必要はない。人は高等に進化した丈に磨かなければならぬ。鉱物に例して云わば岩石などは人工的に琢磨するの必要はない天然のままにて還て素朴なる処に風韻あつて宜いのである。然るに高等なる寶石や水晶等は人工的に琢磨しなくては其に具有て居る光りが放つように為らぬ。人間は高等に進だ丈に充分に信心を薰練し即ち能く如来の光明に靈化せられざれば如来の靈力を以て快轉することが出来ぬ。是れ信心の精練を要する所以である。

教祖の精練

釈尊は御生れつき三十二相の備り完全無欠の形体にて在ます。然してなお身体各部

に互りて脳髓神經より筋骨皮肉凡てに於て充分に精練鍛冶し給いて実に弥陀の靈光に充されし靈器に在した。

就て何人も思うならん、釈尊は精神には実に大悟徹底して不可思議の力を以て如何なる惡魔外道をも降伏し給うならんも御身体は本、王宮にありて数多の侍女にかしづかれたる玉体なれば体力としては逆も寒熱等の自然の刺激に対しては抵抗する程の皮膚筋力等は持ち給わざりしならんと。否、仏陀は王宮を出て山に入ての苦行はいかなるものも及ばざる体練の行を敢行なされたる結果として風雨寒熱にも亦いかなる事も能く耐得らるる体力を有し給うた。

然らば今、念仏者が教祖の如くに光明中の人となりて如来の靈力を現すべき器たる身心とならんには山に入りて修行せねばならぬ哉と云うに然らず、只教祖は斯の光明を発見せんが為に長年を要して御修行なされた。なれども我等は現に智愚賢不肖の別なく只、教祖の教を信仰し一心に念仏して至心不斷にして而して念々弥陀の光明

に撰取せらるることを信じて心々相續して止まざれば声も呼吸も悉く光明に靈化せられ靈光に薰染して四百兆の細胞迄も悉く光明中のものとなる。身も心も悉く是れ如來の有である。此の四支五官凡ての機体も乃至全身を循環する血液も呼吸の息も凡ての分泌物までも弥陀の靈光に浴して此の器械が愉快に運轉するように成り得らる。若し全く如來の聖意を會得して我は如來の子である、親と子との間に溫き血は通つて居る。教祖は我等に此の身も心も弥陀のものとして獻げて使うべき御模範を示しなされた。

光明生活の階級

天に在ては弥陀地上に出ては釈迦、大小異りと雖、因体の異方現に在す。大宗教家としての釈尊は弥陀の光明を人格的に現じなされて一切の衆生に模範を示しなされた。我等は之れに則りて光明獲得せんが為に一心に念仏する時は頓て光明の人となり得らる。若し然らば其光明を獲得し光明の生活と為らんには初心より直に

円満えんまんにして教祖きょうその如ごとくに成得じやうとくさるるものなるか、將はた階級かいきゆう的に進歩しんぽするものなるかと
 問とねば斯この信仰しんこうの生活せいかつには階級かいきゆうなくてはならぬ。其その光明こうみょう獲得かくとくの順序じゆんじよは恰あだかも月つきの盈みち
 欠かけの如ごとくに譬たとえらるる。現世界げんせかいに於おいて全まったく円満えんまんなる仏陀ぶつだのみ満月まんげつにて文殊もんじゆ弥勒みらく等は十四
 日かの夜よの月つき、各宗かくしゅうの祖師そしの如ごときは十二じふに三夜さんやの月つきにて、初はじめて信仰しんこうの光明こうみょうを獲得かくとくした
 人ひとは初はじめて現あらわれたる三日月かづきの如ごとくである。又また毫ごうも光明こうみょう獲得かくとくせざる人は晦日みそかに譬たとえらるる。
 又また縦令じゆんねい念仏ねんぶつすと雖いえども光明こうみょう獲得かくとくせざるものは黒月やみよに譬たとうべきである。又またいかに仏教ぶつぎやうを
 広ひろく学まなび弁才べんさい無碍むがいなるも如来にやうらいの光明こうみょう獲得かくとくせざる人は人生じんせいの闇路やみじを辿たどって居いる盲目もうもく生
 活かつである。何人なんびとも人ひとと生うまれたる上うへは如来にやうらいの光明こうみょうを得えて生せいを覚醒かくせいすべきである。而しかし
 て光明こうみょうの中うちに向上こうじやうの一路いちろを辿たどりて歩ほむこと月の纖月せんげつより一夜や々々まんげつに満月まんげつに進すす
 むよういぎに信仰しんこうの生活せいかつに入るものも、初はじめて如来にやうらいの子こたるを自覚じかくする時とき、人生じんせいが価値かちあ
 る意義いぎある生活せいかつに入りたるのである。教祖きょうそ釈尊しやくそんの教化きやうけの目的もくてきは総すべての人々ひとびとをして斯この
 光明こうみょうを獲得かくとくして光明こうみょうの生活せいかつに入るべき真理しんりを教おしえ給たまうのである。

諸根悦予

諸根悦予、先に演た如く釈尊の諸根（眼耳鼻舌身）凡ての機能が能く調順して凡ての機体が完全無欠なるのみでなく御身体中の各部が能く調練し、実に弥陀の靈徳を安置すべき聖檀にて在ます。釈尊は自ら五根等の凡ての生理機能を能く調伏して在ませば動転輕躁の挙動等は毫も為し給わず。されば釈尊の行住坐臥にも威儀尊嚴にして六根寂靜に在ましても端嚴なる靈儀を瞻る時は何人も真に畏敬感服せざるものはない。然れば世尊成道し給いて後、牟枝隣陀竜王の池に向い給う道に於て一の道士に遇なされた、優渡伽と云う。世尊の相好及び六根の寂靜に在まして威儀端嚴なるを瞻て奇特の想を為し頌して云く、「世間諸の衆生は皆三毒の為に縛せらる故に諸根輕躁にして外境に馳蕩す、然るに今仁者を見上まつるに諸根極めて寂靜なり、必ず解脱地に到り給うこと決定して疑なし、仁者其姓は何等と」是釈尊の諸根が寂靜にし

て威儀いぎの最もとと尊嚴とうとんき方面ほうめんである。

斯かくの如ごときの形式けいしきの中うちに最もつとも豊富ほうふなる靈妙れいみょうなる暖和だんわなる快活かいかつなる内容ないようは即すなわち如來みおやの慈じ悲ひの光明こうみょうの充実じゅうじつである。此この内容ないようの最もつとも円満えんまんなるは弥陀みだ三昧まいの實質じつしつである。大自在だいじざいの四德しとく莊嚴じょうごんと自受法樂じじゆほうらくに満みち給たまう釈尊しゃくそんの身体諸根しんたいしよこんの凡すべてに互わたり能よく調ととのい澄清神鑒ちようしやうしんかんなる明鏡めいきやうの影かげの表裏ひやうりに暢とおる如ごとく弥陀みだの三昧まい重々じゅうじゅうむ無尽じんふ不可說いかせつの内容ないようの歡喜妙樂かんきみょうらくの靈感れいかんが悦よろこびに満みたされてある故ゆえに神たましいは蓮華藏世界れんげざうせに安住あんじゅうし給たまう。無尽むじんの法樂ほうらくを受うけて在まします故ゆえに凡夫ぼんぶの心こころが常つねに五塵ごじんの境きやう、見みるにつけ聞きくにつけて心こころが馳蕩ちとうして輕躁動轉きようそうどうてんし妄想もうそうの波浪止はろうやまざれば靈境現れいきやうげんじ難がたきが如ごときと同おなじからず。

我等われらが生うまれたままの五根ごこん及び凡すべてがゆっくりと沈靜ちんせいして居おらぬのは、只目ただめや耳みみの色いろや声こえにのみ心こころが奪うばわれて其その内面ないめんにじつと心こころを落おち着つけない為ためである。然しかるに我等われらは教祖きやうその御教みおしえに本もとづき凡すべてを如來にやらいに献ささげて其その温かなる如來にやらいの慈悲じひの懷ふところに入いる時ときは、何時いつしか其光明そのこうみょうに融合ゆうごうして身みも心こころも總すべてが第一だいに我われと云いうものが如來にやらいの中なかに融とけ

あ 合うて無我の本体となり如來中の我となつて始めて諸根悦予の心理状態となる。

姿 色 清 淨

教祖釈尊の金色の上に御血色のいと清らかに在せしは血液循環や呼吸及び発声等の神経及び分泌液等の調節作用が能く調練し節の宜しきを得給えはなり。故に内的生活も調節が適和する故に其が表現して姿色清淨皎潔である。

抑も血色及び気色を能く調えんには氣海丹田に氣を養い靈氣に満ち邪氣去り、神氣玲瓏玉の如くなるべきである。即ち仏陀の金色の靈色が常に身体を養い血液の循環順調にして四大常に輕安に金色の靈色は外塵の為に酸化して鏽を生ぜず。宇宙の最靈英氣たる弥陀の心光に養われて在ます釈尊の御容色の金色なるは何故なるか、黄金と云うものは外氣の為に酸化して鏽を生ずることなく何時も変色せぬものである。釈尊

の御精神の内容の本質が純粹真靈にして弥陀の慈悲に充されつつ在すのは凡夫の心が
 煩惱を以て胸に充ち、外塵の目に色を視耳に声を聞く等、眼の欲耳の欲等の為にひか
 れて外境の為に染汚されて、凡夫の心は恰も鉄類其他の金属のように錆を生じて変
 色するものと同一でない。即ち外から惡口罵詈に遇ば忽ち憤怒して色に現れ又紅顏粉
 黛の麗しきに値えば惑い易く、内に貪瞋の念が生ずれば忽ちに其の喜怒哀樂が外容に
 現わる、或は憤怒胸に充れば忽ち赤鬼の如く赫として焰を燃し、恐怖に打たれては
 忽ち顔色蒼白として青鬼の如くに変ず。縁に触れ境に対して内心に起れば即ち容色に
 変化するが凡夫の常である。

然るに如来の靈応に充されたる教祖は決して然ることはない。何なる境遇にも御胸
 の内が動ぜぬ故に御容色にも変化はない。凡夫の喜怒哀樂が忽ちに姿色に現るると釈
 尊のいかなる境遇にも金色の燦爛たる御容色が清らかにして何時も変じ給わぬのは御
 胸の内容が異なる所以である。

世尊或時提婆達多が阿闍世太子と謀りて世尊及び諸弟子等を害せんと欲して世尊及び諸の弟子を請じて王城に迎え入れぬ。謀りて五百の大象を酔わしめて之を刺殺せんと為せしに諸の弟子衆が城に入るや醉象鼻を鳴して進み牆壁を塘突し樹木を折敗し等して城内戦慄せり。時に五百の羅漢空中に飛び上り難を避んとした。独り阿難のみ仏の辺りに在り、醉象頭を挙げて至り前で仏の御所に趣む。時に世尊は大悲心を以て和顔微笑し御口より光りを放ちて五指より五の獅子を現わし同声に俱を吼ゆ、其声天地に震動した。醉象地に伏して敢て頭を挙ず。時に阿闍世太子は釈尊の最後いかなる醜態を呈するかを見んと欲して窈かに隠れて其様子を窺うた。世尊は醉象一同が獐猛狂惡の姿にて向い来るも世尊が威容頭赫にして微笑し給う時の麗わしき御相の常にも超て妙に淨きを瞻て其御姿は痛く太子を感動せしめた。為に深く懺悔し奇異の思を起して世尊に帰依し奉り、謂らく曾て自ら帰依する処の提婆達多は若しも意に逆う時には忽ちに憤怒の色が容貌に現れたりしも今日世尊を見奉るに斯の如きの危急の

場合に臨みても還つて和顔微笑し給う如きは実に眞の聖者に在すなり。然らざれば何ぞ茲に到らんと、深く前非を悔て初めて仏世尊に帰依し奉れりと。

又世尊が祇園寺に於て國王及び大臣等の為に説法し給う折、外道等が仏陀に對する帰依を壞らんが為に旃荼弥と云う妖婦に盆を繋ぎて腹を大きくして百千の坐を分けて世尊の説法し給う高座の側に立て諍て曰く、沙門よ我が夫よ君何ぞ自ら家事を顧ずして還て他人の為に説法し給うぞ。君独り自ら樂みて我が苦を思わざるや曾て我と通じて我を娠ましめ今当に臨月に近附けり酥油を求めて小兒を養う為に我に資金を給せよと。衆悉く驚異の眼を注ぎて之を觀る、時に帝釈天は護法の為に化して一の鼠となりて其の衣裡に入りて盆の繫を噛み切れば忽ち盆は地に落つ、時に於て世尊は毫も驚き給わず和顔麗しく光容巍巍として敢て怒り給わず実にいかなる境遇にも姿色不變にして光顔異なることなし。時に集会皆外道等の中傷的譎謀の憎むべきを責むれば外道等還つて自ら赧顔慚愧に耐ずして其座を起てりと。

又、舍衛国の流離王兵を起して釈尊の一族を伐つ。世尊の一族咸とく亡さるる時に阿難等の釈種の弟子達は非常に悲歎すれども世尊は毫も歎き給わず光顔異ることなし、阿難仏に白して曰さく、世尊よ釈種の危難に罹るに何ぞ悲歎し給わざりし哉。世尊の曰く、是れ過去世の業因ありて此の報を受く我は曾て此のことを知れり、故に今更に歎かじと。実に世尊は如何なる境遇にも姿色変じ給わず。然れば惡意を以て向える提婆に対しても羅喉羅に対しても常に感情公平にして異ることなしと。実に公明正大なる世尊の人格は弥陀の光明に満されたる御身心なればなり。去れば姿色の上に表わること斯の如く在ます。

光 顔 巍 々

世尊の光顔巍々として威神極まりなきは弥陀の威神力と合致したる御意にして能所

一体金剛の如く動じ給わざる威神力在すが故である。是れ念仏三昧の釈尊の御意志が弥陀の聖意と合致したる定力の表現である。

世尊の威徳巍々として接する人をして感ぜしむ。去れば何なる驕慢邪見の人も其の威徳の前には自ら屈服せざるものはない。然れば世尊成道し給いて初めに阿若憍陳如等の五人の許に詣りて彼等を度せんと欲し給うに先だち彼等五人共に語らく、悉多太子今は行に疲れ道成ぜずして我等が所に来らん、若し彼れ此所に至らば我等は昔の如くに敬礼することを為ざらんと共に約して居りしに、世の諺にも人指せば影さすとか、時に世尊は威儀寂静として五人の所に至り給う。彼等は世尊の威顔に接するや自ら我を忘れて膝を屈し頭を垂れて敬礼せり。釈尊の曰く汝等先きに自ら云わざりしや我等は昔の如くに敬礼せざらんと、然るに今其約に違うて礼するは如何にと仰ければ彼等は白して言さく、今太子全く真に道を得給えり。我等は敬礼せざらんと欲せしも君の威神力我等を感ぜしむ。誠に是れ真に正真の道を得給えるが致す所なりと。五

人は深く其の威神力に服して竟に弟子とは成りぬ。仏陀は絶対無限の威神光明なる弥陀の靈徳を受く。而して無限の威力より釈尊の身に現じ給うが故に光顔巍巍たるなり。世の人意馬心猿外境に惹起せられ、内心に喝きて劇しき浪停め難し。之れを統一せんには即ち世尊に倣いて至心に弥陀を念じて心に弥陀を離れず一心金剛の如く自ら三昧純熟して純一無雜の思念無想の境に入らん。如来と合したる時に善も念わず悪も念わず一切の意識超絶し、我滅び如来の威力に満さる時に自ら威顔巍巍たるを得む。

云うことを休めよ、我等は上根上智の器にあらず、何にして世尊に倣いて光顔巍巍たるを得んと。弥陀の威神力は必ずしも智慧と根機に拘わらず、只己を捨てて弥陀を念じ全く至心に念仏する時は必ず三昧成ずべし、三昧成ずれば弥陀の威力全身に満つ。故に光顔巍巍々と表わるるに至らむ。然れば教祖の教に随って三昧を修すべし。三昧定力功を成せば弥陀の威神力に充され威力具備するが故に光顔巍巍々の相を現ぜむ。

上來説き来る三相、諸根悦予は全体に亘りて五官及び一切の生理機体が完成にして能く鍛あげてみれば金剛の如くに堅くして、其の全体は弥陀の慈悲に充されて靈力を以て働く器械である。姿色清浄は血液の循環や呼吸の氣息、発声運動等の都ての調節機能が完全にして順調に快転すべき膏を豊饒にする。

念仏三昧の生理的調適

諸根悦予。如來の大靈力を機関と爲る生理的機関がよく調適せざれば身口意の三業が自由に運転が出来ぬ。教祖は三昧定力が能く発達して啻に心靈的に完全たるのみに非ずして、生理機能の全体に亘りて能く調練調達なされて毫も遺憾なし。念仏三昧を修習する人能く教祖の範に則りて能く弥陀の靈能の機関たる自己の生理機能全部の調練に力めよ。諸根悦予とは生理機能全部の調適したる爲に快活に悦予に運転自在を

為すなり。

姿色 清淨。釈尊の神色 清淨皎潔、如來妙色身、世間無与等と姿色 清淨なるは
氣血循環の調節宜しきより發現する徵候なり。氣血の順調は機関運轉の原動力たる蒸
氣力に例うべく、靈に充されし三昧狀態、如來を念じ口に称名を唱え意に弥陀を念
じ、念々相續し声々連續する時は、心靈を通じて氣血も悉く弥陀に同化する。此血液
が靈化し一々の肉の細胞に至るまで悉く弥陀に化す。一切の生理的内容の實質が悉
く靈的に快活となる。故に其内面に靈的快活なる氣血は表に姿色清淨と現れる。
血液と精神との關係は或刺激に應じて内心に非常なる恐怖を起す時は血液循環が
渋滞し閉塞して其快色を失ひ蒼黒の色となる。之に反して内心に弥陀という靈界の太
陽に向つて常に新鮮なる靈氣を豊富に享受する時は内心快感に心臓常の開きよく働く
故に姿色清淨にて快感極りなきに至る。

光顔巍々とは三昧の生理的の中心統一的精神の最強なる勢力あることを明す。すべて

の機関きかんが能く巧妙こうみょうに蒸氣力じょうきりよくが充分じゅうぶんにあるも機関きかんを運轉うんでんする技師ぎしが技倆ぎりょうが完全かんぜんなるを要する如く、如來にょらいの靈力れいりよくを以て我靈力わがれいりよくなりとし、我身わがみと心こころとの凡てすべを如來にょらいの機関きかんに使用すべき精神統一せいしんとうの心意的意志しんいていきいしが完全かんぜんなるを要す。釈尊しゃくそんが光顏巍巍こうげんぎぎたるは此身心凡て統一せる精神せいしんの最も強度きやうどにして巍然きぜんとして動ぜず、すべてを調御ちやうぎよしたる相なり。

光顏巍巍こうげんぎぎに二の勢あり。一には弥陀みだを自己じこの生命せいめいとして凡てを統一し調御ちやうぎよして卑劣ひれつ欲を制すると共に如實にょじつに躍進やくしんし内容ないようの豊富ほうふなる力が如來にょらいの命めいのままに活動かつどうす。統一は理性りせいにして活動かつどうは内容ないよう充實じゅうじつの力の發動はつどうする処である。釈尊しゃくそんの如何いかなる物も犯すことのできぬ威神力いじんりきがありて如實にょじつに衆生しゅじやう濟度じやうどの行動こうどうの実に偉大いだいなるはここに原動げんどうあり。

此三昧このまいを以て身心しんしんを調練ちやうれんするの中心ちゆうしんと為るは此精神統一このせいしんとうし制御せいぎよして如實にょじつに躍進やくしんして靈動的れいてきに活動かつどうし身口意しんくゐの三業ごうを以て弥陀みだの靈力れいりよくを自己じこに依りて現げんすべきにあり。釈尊しゃくそん此好模範こうもはんを示し給たまえり。

光明主義に就いて

吾人が主張する光明主義の御質義に対して安心の大意を演べて主義を明かにせんとす。信条の三条件を明せば、一、所求、二、所帰、三、方法。

一、所求とは、信仰の要求する所はみおやの光を獲得して光明の生活に入るを目的とす。光明を被むる時は従来の盲目的生活より覚醒して、みおやの光明中の人となり、現在を通じて永遠の光明に入ることを得る。人の天性は六根は染汚にて感情は苦悩である、智は無明にて意志は罪惡である。我等が生れつき有て居る弱点は自分の力にて除くことが出来ぬ。唯、みおやの清浄と歡喜と智慧と不断との光明の摂化を被りて光明中の人となることを得る。光明中にも肉体ある間は精神的に光明中に生活し命終る時は現実に光明土の人と為り得る、即ち浄土に生るることである。

二、所歸しよきの本尊ほんぞん、弥陀尊みだそんは絶対的ぜつたいてきの中心本尊ちゆうしんほんぞんに在まして現在未来げんざいみらいを通じて唯一ゆいのみおやに在ましせば無量無碍むりやうむげの光明こうみょうを照てらして念仏ねんぶつの衆生しゆじやうを摂取せつしゆし給たまう。我等われらが肉体にくたいは太陽たいやうの光ひかりにて活いかされある如ごとく、我等われらが心靈しんれいは弥陀みだの光明こうみょうに依よりて活いかされてある。如来にょらいは見けんと不見ふけんとに係かかわらず真正面まっしやうめんに在ましことを信しんじて其照鑑そのしやうかんの下に精神指導せいしんしづうされつつあることを信しんすべきである。是かくの如ごとくに帰命きみやうする本尊ほんぞんを確信かくしんすべきなり。

三、去行きぎやう——方法ほうほうとは如何いかなる方法ほうほうを以もつてみおやの聖意みむねに称かない光明こうみょうの中に摂めらるるかとなれば、只本願ただほんがんの名号みやうごうを称すなわえ即ち念仏ねんぶつ三昧まいを以もつてす。如来にょらいの慈悲心じひしんは我等われらが心こころに入り、我等われらが信念しんねんの心こころは如来にょらいの中うちに入り、見みると不見みざるとに係かかわらず一心しんに念仏ねんぶつして如来にょらいの慈悲じひに同化どうかせられんことを要ようす。常に如来にょらいの中うちに在あり光明こうみょうの生活せいかつを得え、肉体終にくたいおわれば報土ほうどに生しやうずることを得う。

要ようする所ところ、光明王こうみょうおうを本尊ほんぞんとし、光明名号こうみょうみやうごうを称となえ、光明中こうみょうちゆうに生活せいかつするを宗趣しゆうしゆとす。

光明の生活終

如来光明礼拝儀

○晨朝の礼拝

南無阿弥陀仏

三礼

至心に帰命す

法身 報身 応身の聖き名に帰命し奉つる 三身即一に在ます最
と尊とき唯一の如来よ 如来の在さざる処なきが故に 今現に此
処に在ますことを信じて 一心に恭敬し奉つる 如来の威力と恩
恵とに依て活き働らき在ことを得たる我は 我身と心との総てを
捧げて仕へ奉らん 冀はくは一に光榮を現はすべき務を果す聖寵
を垂れ給へ

如来光明歎徳章

仏阿難に告たまはく 無量寿如来の威神光明最尊第一にして諸仏
 の光明及ぶこと能はざる所なり 是故に無量寿如来を無量光仏
 無辺光仏 無礙光仏 無対光仏 焰王光仏 清浄光仏 歡喜光仏
 智慧光仏 不断光仏 難思光仏 無称光仏 超日月光仏と号し奉
 つる 其れ衆生有て斯光に遇ものは三垢消滅し身意柔軟に歡喜踴
 躍して善心生ぜむ 若三塗勤苦の処にありて此の光明を見たてま
 つらば皆休息を得て亦苦悩なく寿終の後皆解脱を蒙むらん 無量
 寿如来の光明顕赫にして十方を照耀す諸仏の国土に聞こえざるこ
 となし但だ我今其光明を称するのみにあらず一切の諸仏声聞縁覺
 諸の菩薩衆も咸く共に歎誉したまふこと亦また是の如し 若衆生

ありて其光明そのくわうみやうの威神功徳ゐじんくどくを聞きて日夜にちやに称説しょうせつして至心しん不断ふだんならば意こころの所願しょがんに随したがひて其国そのくにに生しやうずることを得えて諸もろくの菩薩ぼさつ声聞しやうもん大衆だいしゆに共ともに歎たん譽よして其功徳そのくどくを称しょうせられん其然そのしかうして後のち仏道ぶつだうを得うる時ときに至いたりて普あまねく十方じふぱうの諸しよ仏菩薩ぶつぼさつに其光明そのくわうみやうを歎たんぜられんこと亦また今いまの如ごとくならむ仏ほとけの言のたまはく我無量寿われむりやうじゆ如來にやうらいの光明くわうみやう威神ゐじんの巍ぎ々ぎ殊妙しゆめうなることを説とかんに昼夜ちゆうや一劫いつこくすともなほ未いまだ尽つくすこと能あたはじ

至心しんに勸請くわんじやうす

三身即一さんしんそくいつに在まします如來にやうらいよ如來にやうらいの真み應身からだは在いまさざる処ところなきが故ゆゑに今我身体いまわがからだは如來にやうらいの靈れい應おうを安やど置おすべき宮みやなりと信しんず諸もろくの聖者せいじやの心こゝ宮みやに在いましし如ごとく常つねに我等われらが心こゝろ殿たに在あらせ給たまへ今いまや己おのれが身みを献ささげて至心しんに如來にやうらいの靈れい應おうを勸請くわんじやうし奉たてまつる靈れい應おう常住とこしなへに我心わがこゝろ殿たに在ましして

転法輪たかきむらびきを垂たれ給たまへ

至し心しんに讃さん礼らいす

南無無量寿なむむりやうじゆぶつ仏

本ほん有う法ほふ身しん阿あ弥み陀だ尊そん

本ほん迹じやく不ふ二になる靈れい体たいの

南無無量光なむむりやうくわうぶつ仏

十じふ方ほう三さん世ぜ一いつ切さいの

独どく尊そん統とう攝せふ歸き趣しゆに在ます

南無無辺光なむむへんくわうぶつ仏

如に来よ無む辺へんの光くわう明みやうは

徧あまねく法ほふ界かい照てらしては

迹あとを十じふ劫こふに垂たれ在ましし

無む量りやう寿じゆ王わうに歸き命みやうせん

法ほつ報ばう応おうの本ほん地ちなる

無む量りやう光くわうを頂ちやう礼らいす

四し大だい智ち慧ゑの相すがたにて

衆しゆう生じやうの智ち見けんを明あかすなり

南無無礙光仏

如來無礙の光明は

靈德不思議の力にて

南無無對光仏

絶對無限の光明に

諸仏と等き覺位をえ

南無饑王光仏

衆生無始の無明より

大饑王の光にて

南無清淨光仏

如來清淨光明に

神聖正義恩寵の

衆生を解脱し自由とす

摂化せられし終局には

大般涅槃に証入す

惑と業苦の極なきも

一切の障り除こりぬ

我等が塵垢は滌がれて

我等が塵垢は滌がれて

六根常に清らけく

南無歡喜光仏

如来歡喜の光明に

禅悦法喜微妙なる

南無智慧光仏

如来智慧の光明に

仏の智見を開示して

南無不斷光仏

常恒不斷の光明に

作仏度生の願みもて

南無難思光仏

姿色も自づと潤はるれ

我らが苦惱は安らぎて

喜樂極なく感ずなり

我等が無明は照されて

如来の真理悟入るれ

我らが意志は靈化せば

聖意現はす身とはなる

甚深難思の光明を

信心喚起の時いたり

南無無称光仏

如来の慈光被むれば

神秘の靈感妙にして

南無超日月光仏

智慧の日月の照す下

聖意を己が意とし

光明摂取の文

至心不斷に念ずれば

心の瞤瞤とは成ぬへし

七覚心の華開らき

聖き心によみがへる

光の中に生活す身は

三業四威儀に行爲なり

如来の光明は遍ねく十方の世界を照らして念仏の衆生を摂取して
捨て玉はず

念仏三昧

次に総回向の文

願はくは此功德を以て平等一切に施こし同じく菩提心を発して安
 楽国に往生せん

至心に発願す

智慧と慈悲とに在ます如来よ 教主世尊が六根常に清らかに光顔
 永しなへに麗はしく在ししは内靈応に充給ひければなり 我らも
 完徳の鑑たる世尊に倣ひて如何なる境遇にも姿色を換へざること
 を誓ひ奉つる 願はくは常に慈悲 歡喜 正義 安忍 剛毅 貞
 操 謙遜 真実等の徳を体し 外は怨親平等に同体大悲の愛を以
 て佗に對し得らるるやうに恩寵をたれ給へ

南無阿弥陀仏

三礼

○昏暮の礼拝

南無阿弥陀仏

三礼

至心に感謝す

大慈悲に在ます我らが如来よ如来が与へ給へる明き光と清き影
気と新らしき糧とに依て今日一日の務めを果したる恩徳を感謝し
奉つる 又如来の神聖と正義と恩寵との光明を被むり今日聖意に
契ふ務めを得たりしは全く聖寵の然らしむる処 深く其の恩徳を
感謝し奉つる

如来光明歎徳章

晨朝と同之

至心に懺悔す

法身と智慧と解脱の三徳を備へ給ふ如来に告白し奉つる 自身は

現に是れ罪惡の凡夫 心の至らざるよりして作す可らざる罪を造り
 作すべき事を怠るの罪に陥いれり 是れ皆な自からの過なり
 實に大なる過りなることを感じて至心に懺悔し奉つる 今より後
 は悔い改め邪惡を捨て正善に就かんことを誓かひ奉つる 願くは
 恩寵に依て再び過に陥ること無く正しき人と為さしめ給へ

如来十二光の讃頌

晨朝の如く

光明攝取の文

同

念仏三昧

同

総回向の文

同

至心に回向す

至善に在ます如来よ 我らは曾て心闇くして如来の在ますことを

識^しらざりき 然^{しか}るに如^み來^おの大^{だい}悲^ひ招^{せう}喚^{くわん}の聲^{こゑ}に驚^{おど}ろきて 至^し心^{しん}に如^に來^よ
に帰^き依^えし奉^{たてまつ}れり 願^{ねが}は我^{われ}ら^を無^む限^{げん}の光^ひ明^{かり}の中^{なか}に永^{えい}遠^{えん}の生^{いの}命^{のち}を与^{あた}
へ給^{たま}へ 又^{また}願^{ねが}はくは上^{かみ}は如^に來^よの聖^み寵^{めぐみ}を被^{かう}り下^{しも}は一^{すべ}切^ての同^{どう}胞^{ぱう}に聖^み寵^{めぐみ}
を頒^{わか}つことを得^えしめよ 又^{また}我^{われ}等^らを惡^{あく}魔^まの誘^い惑^{なひ}よりさけて聖^{きよ}き道^{みち}に
向^す上^すむことを得^えしめよ 又^{また}聖^み意^{むね}を世^よの同^{どう}胞^{ぱう}にしらしめて聖^{きよ}き光^{ひかり}
の中^{なか}に共^{とも}に安^{やす}寧^きを得^えむことを希^{こひ}がひ奉^{たてまつ}る

南^な無^む阿^あ弥^み陀^だ仏^{ぶつ}

三^{さん}礼^{らい}

如^に來^よ光^{くわう}明^{めい}礼^{らい}拜^{はい}儀^ぎ終

録附 聖 きみくに

聖きよき啓しめ示しを被かうむりて
 清きよきみ天そらは朗ほがらかに
 雲くもに聳そびゆる高たか楼どのは
 瑠璃るり宝ほう石せきの莊しやう嚴ごんの
 七ななの宝たからの池いけ見みれば
 金こがねの沙いさごはきらゝかに
 宝たからの樹うゑきに玉たまの枝えだ
 みそのに遊あそぶ樂たのみは
 天あまつ乙をとめ女めは雲くもを分わけ

三さ摩ま耶やの窓まどし開ひらくれば
 常とこ世よのみ国くに現あらはれぬ
 金こがね銀しろがねまに真しん珠じゆ
 照てり輝かやくこと窮きはみなく
 八やの功く徳どくの水みづみてり
 清すめる面おもにぞ照てり徹とほる
 金こがねの花はなは咲さきにはふ
 無む為ゐの都みやこの春はるながし
 奏かなづるしらべ妙たへにして

ひゞける音おとの樂たのしさは
日ひ日に六度むたびの花はなの雨あめ
きしの山吹やまぶき宛さながらに
三昧さんまいの筵むしろに座ざを占しめて
烏瑟うしつの緑みどりは天そらにこい
金かねの相好すがた妙たへにして
巍たかき威儀みいづは嚴おごそかに
菩薩ぼさつは妙たへなる法身のりのみに
如来にょらいを繞めぐりし装よそはひは
無為泥洹むゐないをんの境さかひには
大悲心だいひこころに薰くんじてぞ

身みのおき処どとも覺おぼほえじ
金かねの庭にはにぞふりつもる
何いづれの色いろぞとまがふらめ
仰あふぎ奉まつれば弥陀尊みだそん
五山ごせんの毫光がうくわうかゞやける
月つきのみ顔かほは円まどかなり
萬よろづの徳とくは満みちみてり
おのゝ威徳ゐとく備そなはりて
雲くもの月つきをかこむ如ごとと
長閑のどけさ有無うむを離はなれにき
分身利物ぶんしんりもつの極きはなけむ

念仏七覚支

(一) 摂法覚支

弥陀の身色紫金にて

円光徹照したまへる

端正無比の相好を

聖名を通して念ほへよ

総の雑念乱想をば

排きて一向如来に

神を遷して念ずれば

便はち三昧成ずべし

(二) 精進覚支

声々御名を称へては

慈悲の光を仰ぐべし

身心弥陀を称念し

勇猛に励み勉めかし

金剛石も磨きなば

日光反映するが如と

三摩耶に神を凝しなば

弥陀の光は輝かん

(三) 喜 覺

支

偏へに仏を見まほしく

愛慕の情いと深く

身命惜まず念ずれば

即ち弥陀は現はれん

念々仏を念じなば

慈悲の光にもよほされ

霊きめぐみに融合うて

歡喜極なく覺ほゆれ

(四) 輕 安 覺 支

御名に精神はさそはれて

心念ますく至微に入り

三昧純熟する時は

清朗にして不思議なり

我等が業障ふかき身も
身心あるを覚ほえで

慈悲の聖意にとけあうて
定中安きを感じなれ

(五) 定 覚

支

弥陀に心をうつせみの
三昧正受に入りぬれば
慈悲のみ顔を覩まつれば
入我我入の靈感に

もぬけ果たる声きよく
神氣融液不思議なり
尽ての障礙も除こりぬ
聖き心によみがへる

(六) 捨 覚

支

絶対無限の光明の
此処に居ながら宛がらに

中に安住するときは
神は浄土に栖み遊ぶ

夜なく、仏と共に寝ね
立居起臥添まして

(七) 念 覺

聖寵に染みし我心
聖旨の光に靈化せば
聖旨を意とするときは
みな仏心とふさはしく

朝なく、も共に起き
須臾も離るゝことぞなき

支

秋の梢のたぐひかも
光榮あらはす身とぞなる
八億四千の念々も
仏子の徳はそなはるれ

十二光讃の譜

ハ調 4/4

3 — 3 2	3 3 5 —	2 — 1 6	2 — . 0
ナー ムー	ムリ ヨウー	ジュウー	ブ — ツ
● 2 2 2 —	2 2 1 2	3 3 1 2	2 — . 0
● ホン ヌー	ホ ツ シン	ア ミ ダ ソ	ン
ほんじやく	ふになる	れいたい	の
1 1 1 —	1 1 6 6	2 2 1 6	6 — . 0
ア ト ラー	十 — コ ニ	タ レ マ シ	● シン
むりょうー	じゅおうに	きみょうせ	●

変ハ調
又はヘ調 4/4

聖 き み 国

7 1 7 6 3	1 1 7 6 6	7 1 7 6 7	3 — . 0
● き — よ き	し め — し を	こ う — む り	て
き — よ き	み そ — ら は	ほ が — ら か	に
4 4 4 3	7 . 6 4 3	3 4 3 2 2	3 — . 0
さ ま や の	ま — ど し	ひ ら — く れ	ば
と こ よ の	み — く に	あ ら — わ れ	ぬ

ハ調 4/4

七 覚 支 の 譜

1 1 1 3	2 2 2 1	2 2 3 3	5 — . 0
み お や の	し ん じ き	し こ ん に	て
す べ て の	み だ る る	こ こ ろ を	ば
6 6 6 5	1 1 6 6	5 5 5 3	5 — . 0
え ん こ う	て つ し ょ う	し た ま え	る
ひ ら き て	ひ た す ら	み ほ と け	に
1 1 1 1	2 2 5 5	3 3 5 5	6 — . 0
た ん じ ょ う	む ひ の —	み す が た	を
こ こ ろ を	う つ し て	ね ん ず れ	ば
● 1 1 2 2	6 6 5 3	2 2 3 2	1 — . 0
み な を —	と お し て	お も お え	よ
す な わ ち	さ ん ま い	じ ょ う ず べ	し

辨 榮 聖 者

編者謹誌

大ミオヤの無尽の大悲に催おされて、此の土に輝き出で給いし辨榮聖者は、安政六年二月二十日下総国鷲の谷の念仏者山崎嘉平氏の長男に生を受け給う。家に在りて農事に励み學業を好むこと世の常ならず、十二歳の時弥陀三尊を空中に想見して憧憬の念に堪えず、竟に明治十二年二十一歳にして出家の素志を遂げ、近村東漸寺の碩学大康上人に師事し、毎夜熟睡三時間の外は雜用に學問に忙しく、貫くに念仏一行昼夜断え間なく、或時は手の掌に油を入れ之に浸したる燈心を燈し、或時は腕の上に線香や蠟燭を燈して仏前に供え給う。疾に一切經を誦了し、東京に遊學して中山上人に就きて華嚴を修めし央ばには法界觀の三昧円かに現前し、明治十五年筑波山に籠りて至心念仏の晝には見仏三昧了々と發得し給う。爾來一挙一動全く佛法に相應し、施、戒

忍、進、禪、慧、欠くることなく、大康上人の意を継いで五香に新寺創立を志し明治二十七年本堂落成に至るまでは、雨漏る廃家に夜も燈無ければ線香の火を頼りに聖画を描き、嚴寒にも重ね着せず薬を積んで蒲団となし、超然として勇猛に称名し給う。建立寄附を勧進して遠近を行脚中若し貧窮者に遇えば月日重ねて喜捨を積みし金米全部之に施し給う。途を踏むに蟻は勿論若草までも懇ろに之を避け、大康上人の訃音に接しては即座に報恩別行に入つて不臥念仏一百日に及び給う。明治廿七八年印度に渡りて大聖釈尊の御蹟を巡拝し、帰朝しては東西に巡教し阿弥陀經図絵を施し給うこと廿五万余部、普く米粒名号を施してかりにも一声称名の縁を結び給うこと実に無数、難化の有縁一人の爲にも数年方便して猶措かず、寺の礼遇を辞り態々下男室に夜を明して勸化の縁を求め、夜寒の町に貧者を訪れては当日供養をうけし下着を脱ぎ与えて如来の大悲を喜びあい給う。日毎夜毎の伝道に疲れし色もなく忙中に僅

の閑を得ては如來の尊像教化の御文に筆を選び、汗血のにじむ慈悲の雫が幾千枚。その奉謝の金は悉く会堂の創建となり学園の創立となり数万の文書数十万の礼拝儀の施本に充て給う。食卓の上浴室の中至る所皆説法の道場にて、一所不住の年中巡教極寒極熱一日の休養もなき間に、宿所の縁に随つては古今の書籍近代科学に至るまで孜孜として研め給い、又唱歌音楽五筆の書等、諸技悉く利生の方便ならざるなし。靈応内に満ちて、念々不捨寢息まで自ら称名する程なりし間にも説法に非れば読書、読書に非れば書き物、実に一寸の光陰も為すこと無くして過し給うことなく、集る淨財は悉く利他の用に供えて反古紙一枚をも節約してその裏に原稿を書き給う。一切の時一切の処、ただこれ仏作仏行、寸隙なきその御行狀に接しては始め尊大に構えし人も皆恭敬して其の教に額かざるなく、諸宗は勿論耶蘇教の牧師に至るまで発心してその門に入る。首唱し給う光明主義の光り万民に被る所、念仏三昧各地に盛に

おこな 行われ入信の行者幾万皆 悉く値遇の御恩を感じ泣して尽未来際の願行に奮い立つ。
こ 超えて大正九年吹雪に更くる北越の夜寒身に泌む勸化の旅に老いの御声に尽きぬ如来
おじひ 御慈悲を伝えて最後の三昧会を木枯悲しき柏崎に導かれ給いし十二月四日遷化し給
う。

あお 仰ぎ 惟れば内証 極めて深く外用亦広大に全分度生の無我の力が無作の精進に顕れ
たま 給う辨榮聖者の御一生は、如来光明のさながらの反映に在せば、誰か大慈悲の靈応を
あお 仰がざらむ、誰か光明の摂化を信ぜざらん。